# 谷蟹遺跡群 1

— 第１次調査 —

大野城市文化財調査報告書　第176集

２０２０

大野城市教育委員会

# 谷蟹遺跡群 1

たにがに

— 第１次調査 —

大野城市文化財調査報告書　第176集

２０２０

大野城市教育委員会

# 序

福岡県大野城市は福岡平野の南部に位置し、西暦665年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城」にその名を由来する、古い歴史と豊かな自然に恵まれた街です。特に市の南部には、６世紀中頃から９世紀中頃にかけて須恵器を焼いた窯跡が数多く見つかっており、「牛頸須恵器窯跡」として国の史跡に指定されています。これまでに300基以上の窯跡が調査され、未調査の窯跡も含めると600基にせまるものと考えられています。

今回報告する谷蟹遺跡群周辺では以前から窯跡の存在が確認されていましたが、これまで本格的な発掘調査はありませんでした。今回実施した調査の結果、２基の窯跡を確認しました。そのうち、１基は奈良時代の窯跡であることが明らかとなり、本市の新たな歴史を語ることができる内容となっています。

本書が学術研究はもとより広く一般に活用され、地域の歴史や文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを願っています。

最後になりますが、発掘調査ならびに報告書作成にあたり多大なるご理解、協力いただきました地権者や調査に対してご協力をいただきました関係各位に対しましては、厚くお礼申しあげます。

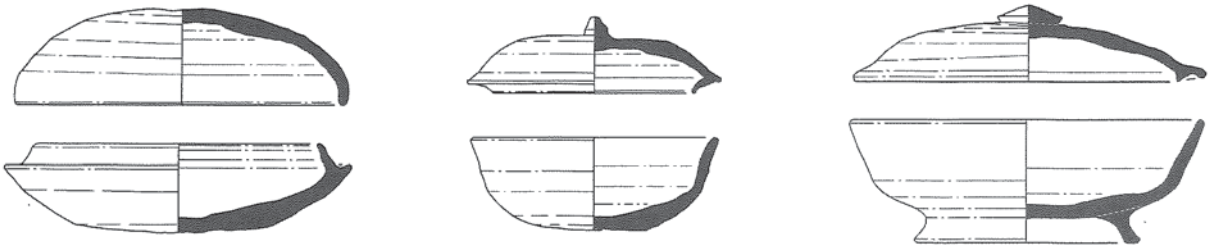
令和２年３月31日

大野城市教育委員会
教育長　吉富　修

# 例　言

1．本書は、福岡県大野城市旭ヶ丘１丁目778番９、792番１、同２丁目778番39所在の谷蟹遺跡群第１次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．調査は、宅地造成に伴う事前調査として実施したもので、発掘調査から報告書作成に至る費用は事業者が負担した。
3．発掘調査は、柴田　剛（現筑前町教育委員会）が担当した。
4．遺構実測および地形測量は、柴田・徳本洋一、川崎敏次郎が行った。
5．遺構写真は柴田が撮影し、空中写真は㈲空中写真企画に委託した。
6．遺物写真は（株）写測エンジニアリングに委託し、牛島　茂が撮影した。
7．遺物実測・拓本・製図は木原　尭が行ったほか、遺構図製図は山元瞭平が行った。
8．本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』（農林水産省技術会議事務局監修）を使用した。
9．本書図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標（第Ⅱ系）による。
10．本書に掲載した遺跡分布図は、国土交通省国土地理院発行の25,000分の１地形図『福岡南部』『不入道』を使用した。
11．本書に掲載の出土遺物・実測図・写真は、大野城市教育委員会が保管・管理している。
12．本書における遺構の分類記号は、以下のとおりである。
　ＳＸ：不明遺構
13．本書における遺物名称のうち、須恵器杯類については平城京分類（凡例）による呼称を用いる。
14．本書の執筆は柴田・木原・山元、編集は山元が行った。

【凡例：須恵器杯類名称】



杯Ｈ　　杯Ｇ　　杯Ｂ

# 本文目次

Ⅰ．はじめに
　１．調査に至る経緯 …… 1
　２．調査組織 …… 1
Ⅱ．位置と環境
　１．地理的環境 …… 3
　２．歴史的環境 …… 3
Ⅲ．調査成果
　１．調査概要 …… 5
　２．遺構と遺物 …… 6
Ⅳ．総括 …… 11

# 挿図目次

第１図　調査地位置図（1/2,500）…… 2
第２図　周辺遺跡分布図（1/25,000） …… 4
第３図　遺構配置図（1/400）…… 5
第４図　１号窯跡実測図（1/40） …… 6
第５図　２号窯跡実測図（1/40） …… 6
第６図　２号窯跡出土遺物実測図（1/3）…… 7
第７図　SX01実測図（1/60）…… 8
第８図　SX01周辺採集遺物実測図（1/3） …… 9
第９図　１・２トレンチ実測図（1/60）…… 10

# 表目次

第１表　出土遺物観察表 …… 12

# 図版目次

図版１（１）調査地全景（北東から）　（２）１・２号窯跡完掘状況（北東から）
図版２（１）１号窯跡検出状況：遠景（東から）　（２）１号窯跡検出状況：近景（東から）
　（３）１号窯跡土層断面（北東から）
図版３（１）１号窯跡完掘状況（東から）　（２）２号窯跡検出状況（北東から）
　（３）２号窯跡完掘状況（真上から）
図版４（１）２号窯跡完掘状況（北東から）　（２）２号窯跡断ち割り状況（北東から）
図版５（１）SX01完掘状況（東から）　（２）SX01土層断面（西から）
　（３）１トレンチ全景（南から）　（４）２トレンチ全景（南から）
図版６　出土遺物（１）
図版７　出土遺物（２）
図版８　出土遺物（３）

# Ⅰ．はじめに

## １．調査に至る経緯

調査対象地は大野城市旭ヶ丘１丁目778番９、792番１、同２丁目778番39であり、周知の埋蔵文化財包蔵地「谷蟹遺跡群」にあたる。対象地は平成15年の豪雨災害時に法面が滑落し、灰原が露出したことで窯跡の存在が明らかとなった。その後平成23年に人力によるトレンチ調査を実施し、窯壁や灰原、須恵器を確認している。

平成29年５月、事業者から対象地の埋蔵文化財に関する問い合わせがあった。事業者は当該地を宅地造成し集合住宅を建設する予定であり、計画通りに工事が施工されると遺跡が破壊されるため、事業者との協議を重ねた。協議の結果、遺跡保護は設計上困難であることから、遺跡が破壊される部分について発掘調査が必要と判断された。

事業者から造成・建設予定図面を添えて93条に基づく届出を福岡県教育庁あてに提出し、平成30年７月12日付で発掘調査の指示が出された。また、平成30年７月６日付で埋蔵文化財発掘調査の依頼書・承諾書が市に提出された。これを受け、発掘調査は平成30年度、整理・報告書作成は令和元年度に実施する旨、協議書を締結し、年度ごとに委託契約を締結し事業を実施した。

調査面積は、約4,673㎡である。平成30年８月６日～平成30年11月30日まで現地での調査を実施し、令和元６月３日～令和２年３月まで整理作業及び報告書作成を実施した。なお発掘調査及び整理作業に関する費用は、ハッピー住建株式会社が負担した。

多大なるご理解とご協力をいただいた、ハッピー住建株式会社代表取締役　米村龍也氏には記して感謝の意を申し上げたい。

## ２．調査組織

平成30年度・令和元年度における調査体制は以下の通りである。

**平成30年度（発掘調査）**

| | |
|---|---|
| 教育長 | 吉富　修 |
| 教育部長 | 平田　哲也 |
| ふるさと文化財課長 | 石木　秀啓 |
| 係長 | 徳本　洋一　林　潤也　佐藤　智郁 |
| 主任技師 | 上田　龍児 |
| 技師 | 山元　瞭平 |
| 主事（任期付） | 坂井　貴志（H30.4～9）　鮫島　由佳　柴田　剛（調査担当） |
| 嘱託（調査） | 澤田　康夫　三浦　萌（H30.4～9） |
| 嘱託（啓発） | 山村　智子　浅井　毬菜 |
| 嘱託（庶務） | 呉羽　京子　西村　友美 |

**令和元年度（整理作業）**

教育長　吉富　修
教育部長　平田　哲也
ふるさと文化財課長　石木　秀啓
係長　林　潤也　佐藤　智郁　上田　龍児
主査　徳本　洋一
主任主事　秋穂　敏明
技師　山元　瞭平
主事（任期付）　鮫島　由佳
嘱託（調査）　澤田　康夫　木原　尭
嘱託（啓発）　山村　智子　浅井　毬菜
嘱託（庶務）　西村　友美　永松　綾子

**発掘調査作業員**

香野　博通　吉田　秀俊　田中　良一　瀧口　松夫　森山　武雄　仁田　幸男
山下　宏明　佐藤　寛行　安部　芳範　諏訪　博恭　綱島　年朗　川崎敏次郎

**整理作業員**

小嶋のり子　古賀　栄子　白井　典子　津田　りえ　仲村　美幸　氷室　優
松本友里恵　村山　律子　吉田　薫

**第１図　調査地位置図（1/2,500）**

# Ⅱ．位置と環境

## １．地理的環境

大野城市は福岡平野東南部の最奥部に位置し、南北に細長く中央部がくびれた形を呈する。北部には四王寺山とそこからから南西に派生する低丘陵群、南部には牛頸山とそこから派生する低丘陵群があり、両者に挟まれた中央部には御笠川が流れ、沖積地や氾濫原といった低地が広がっている。南部の牛頸山は脊振山系の一角をなしており、地盤は早良花崗岩で、表層には風化した真砂土が被覆する。牛頸山の北麓は牛頸川をはじめとした小中河川による開析が進み、無数の丘陵が形成されている。これらの丘陵には多数の須恵器窯が築かれており、史跡「牛頸須恵器窯跡」として指定されている。

今回調査した谷蟹遺跡群第１次調査地点はこうした丘陵の北端部分に位置している。周辺は開発が進み、本来の地形は大きく改変されているが、本調査地は概ね旧状を留めている。

## ２．歴史的環境

大野城市南部を中心とした牛頸山北麓地域では、旧石器時代から近世に至るまでの遺跡が数多く確認されている（第２図）。ここでは古墳時代以降の様相について、簡潔に説明する。

大野城市南部は、古墳時代の中でも６世紀以降に遺跡数が増加する。九州最大の須恵器窯跡群である牛頸窯跡群の操業が開始されるのもこの時期である。最古相の窯跡は６世紀中頃のもので、窯跡群の北部に位置する本堂遺跡群や野添遺跡群において確認されている。当該期の集落は上園遺跡、塚原遺跡、日ノ浦遺跡、惣利西遺跡などで確認されており、その一部は粘土貯蔵穴や焼け歪んだ須恵器の存在から須恵器工人の集落と考えられる。

６世紀末から７世紀前半になると、小田浦窯跡群や中通窯跡群をはじめ、数多くの窯が操業され、操業範囲・生産規模ともに拡大する。大型の窯で多器種を大量に生産したようである。また、牛頸窯跡群に特徴的な複数の煙道を持つ「多孔式煙道窯」の登場もこの時期である。小田浦遺跡群や月ノ浦遺跡では須恵器に加えて瓦も焼成しており、那津官家と目される福岡市那珂遺跡へ供給されている。

集落は梅頭遺跡群や本堂遺跡群で確認されており、丘陵斜面をＬ字に掘り込んだ部分に住居を形成するという特徴的なもので、窯に付随する集落と考えられている。また古墳については、後田古墳群や小田浦古墳群などがあり、窯の操業と連動して築造されている。さらに、梅頭遺跡群１次調査では廃窯後に鉄刀・鉄鏃等を副葬し「墓」として転用した事例も確認されている。なお、ヘラ書き須恵器から、須恵器生産には「大神部」が関わっていたことが指摘されている。

７世紀後半には窯の数が減少し、小型の窯が出現する。特徴的な多孔式煙道窯も当該期を境に姿を消し、直立煙道窯という新たな窯構造が登場するなど、生産の転換期にあたる。

奈良時代になると、須恵器窯は南部へと操業範囲を広げ、生産規模も拡大する。ハセムシ窯跡群、井手遺跡群など小型の窯が群集して操業される例が多く、小型器種中心の生産へと転換する。一方集落は、日の浦遺跡など平地に展開している。続く平安時代には窯の数が急激に減少し、９世紀中頃に位置付けられる石坂遺跡群Ｅ３号窯跡を最後にその操業は終焉を迎える。

**【春日市】**

1．惣利遺跡　2．惣利西遺跡　3．惣利東遺跡　4．惣利北遺跡　5．向谷北遺跡　6．平田北遺跡
7．円入遺跡　8．春日平田遺跡　9．春日平田西遺跡　10．春日平田東遺跡　11．浦ノ原窯跡群

**【大野城市】**

12．梅頭遺跡群　13．本堂遺跡　14．上園遺跡　15．永福遺跡　16．天神田遺跡群　17．末次遺跡
18．谷川遺跡　19．唐土遺跡　20．父子嶋遺跡　21．矢倉遺跡　22．小水城周辺遺跡　23．上大利小水城跡
**24．谷蟹遺跡群**　25．野添遺跡　26．野添窯跡群　27．花無尾遺跡　28．平田１・２号窯跡　29．横峰Ⅰ遺跡
30．横峰Ⅱ遺跡　31．屏風田遺跡　32．日ノ浦遺跡　33．塚原遺跡群　34．畑ケ坂遺跡　35．下野原遺跡
36．月ノ浦遺跡　37．正楽寺跡　38．胴ノ元古墳　39．胴ノ元窯跡　40．胴ノ元遺跡　41．大行事遺跡
42．平野遺跡　43．城ノ山窯跡・不動城跡　44．中通古墳　45．中通遺跡　46．中通古墳群
47．中通窯跡群　48．ハセムシ窯跡群　49．長者原遺跡群　50．笹原遺跡群　51．足洗川遺跡群　52．井手遺跡群
53．原窯跡　54．原浦遺跡群　55．大谷遺跡群　56．石坂窯跡群　57．後田遺跡群　58．小田浦遺跡群

**【太宰府市】**

59．島本遺跡　60．神ノ前遺跡　61．篠振遺跡　62．宮ノ本遺跡

**第２図　周辺遺跡分布図（1/25,000）**

# Ⅲ．調査成果

## １．調査概要

調査地は大野城市旭ヶ丘１丁目778番９、792番１、同２丁目778番39に所在する。今回調査した谷蟹遺跡群（谷蟹遺跡群第１次調査地点）は市の南部に位置し、周辺にはリョーユーパンの工場や

第３図　遺構配置図（1/400）

住宅が立ち並び、旧地形はほとんど失われている。調査地点は、牛頸山から北に派生する丘陵の先端部に近い位置にあたり、標高45～63m前後に立地する。

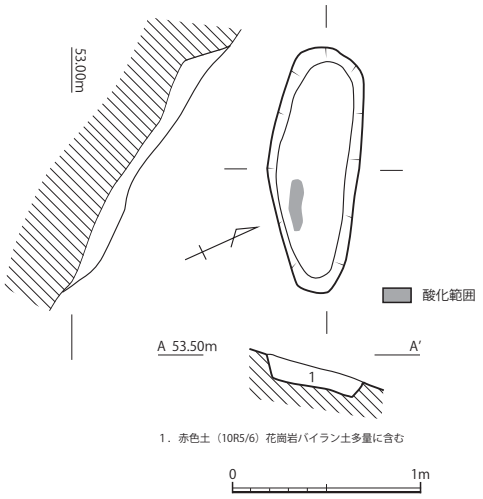
発掘調査は、宅地造成に伴う事前調査として実施した。調査面積は約4,673㎡である。本調査は柴田が担当し、平成30年８月６日より表土除去を開始した。調査区内に除去した表土を仮置きするため、まず北東側の谷部分にトレンチを設定し、遺構の有無について確認を行った。遺構が確認されなかった谷部分に排土を仮置きしながら、慎重に表土掘削を行った。表土除去終了後、作業員による遺構検出、掘削を行い、図面および写真等の記録作業を行った。平成30年11月30日に現地の資材等の撤去をもって終了した。

本調査で検出した遺構は窯跡２基、不明遺構１基である。遺物は須恵器が出土した。

## ２．遺構と遺物

### （１）１号窯（第４図、図版２・３）

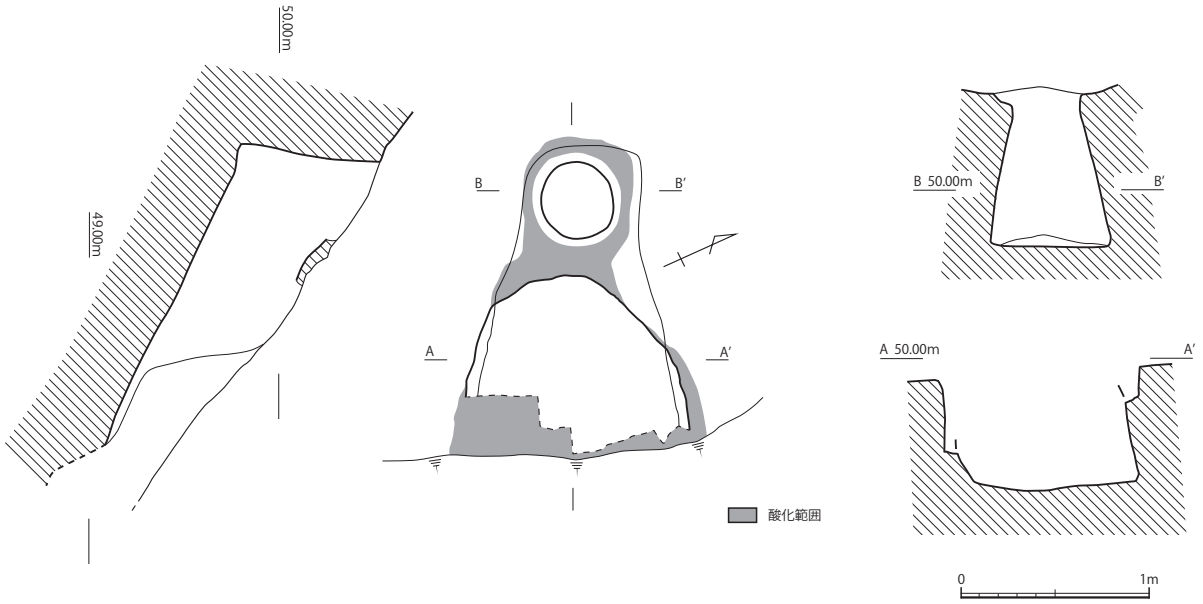
１号窯跡は、北東斜面中腹の標高約51～52mに位置し、等高線にほぼ直交するように検出された。後世の削平により遺存状況が極めて悪く、焼成部から煙道部にかけての床面がわずかに残る程度であった。残存長1.3m前後、幅0.5m前後、床面の傾斜角度は約30°を測る。後述する２号窯と同程度の小型の窯跡と推測される。出土遺物は皆無であった。なお、この窯にともなう灰原もすでに失われていた。




第４図　１号窯跡実測図（1/40）

### （２）２号窯（第５図、図版３・４）

２号窯跡は、北東斜面の下部に立地する。標高約47～49mに位置し、等高線にほぼ直交するように検出された。焚口部から焼成部の一部は後世の削平によりすでに失われていた。燃焼部から奥壁




第５図　２号窯跡実測図（1/40）

までの残存長約1.75m、床面の最大幅約1.35mを測る。床面平面プランは、焚口部にかけてやや裾広がり、燃焼部は断面が蒲鉾状の形態で、天井部の一部が遺存していた。排煙部の形状から地下式直立煙道窯であることが明らかとなった。出土遺物は須恵器である。

**焚口・燃焼部**　焚口・燃焼部は、後世の削平等によりすでに失われていた。

**焼成部**　現存する焼成部中央付近より下半部に最大幅をとり、奥壁は丸くなっている。残存長約1.65m、最大幅約1.35m、床面の傾斜角度は22°を測り、傾斜はそれほどきつくない。貼り床は認められなかった。また、側壁に補修した痕跡などは確認できなかった。窯構築時には、燃焼～焼成部掘削後に地表面から煙道を掘削したことが想定される。

**排煙部**　奥壁が垂直に立ち上がり、煙道口から排煙口にいたる。平面プランは円形で、煙道自体は細長い筒状を呈する。煙道口は径0.37～0.4m、排煙口は径0.5m、煙道口から排煙口までの高さは0.75mを測る。

**前庭部・灰原**　前庭部及び灰原は、後世の削平等によりすでに失われていた。

**出土遺物**（第６図、図版６）

出土遺物はいずれも須恵器で、窯跡検出時及び埋土掘削時に出土した。

１～３は杯Ｂ蓋である。１はつまみの周辺以外は欠損している。つまみは中央がやや尖るボタン状を呈する。また、回転ヘラ切り後につまみを接着したものと考えられる。２・３の口径は18.6～20.7㎝を測る。２の口縁部は短く下方に折れ、逆三角形の形態を取り、口縁部側面に浅いくぼみがめぐる。内面は口縁部と体部の境界に沈線がめぐる。３の口縁部は短く下方に折れ、丸い形態をしている。また、内面の口縁部と体部の境界に浅い沈線がめぐる。

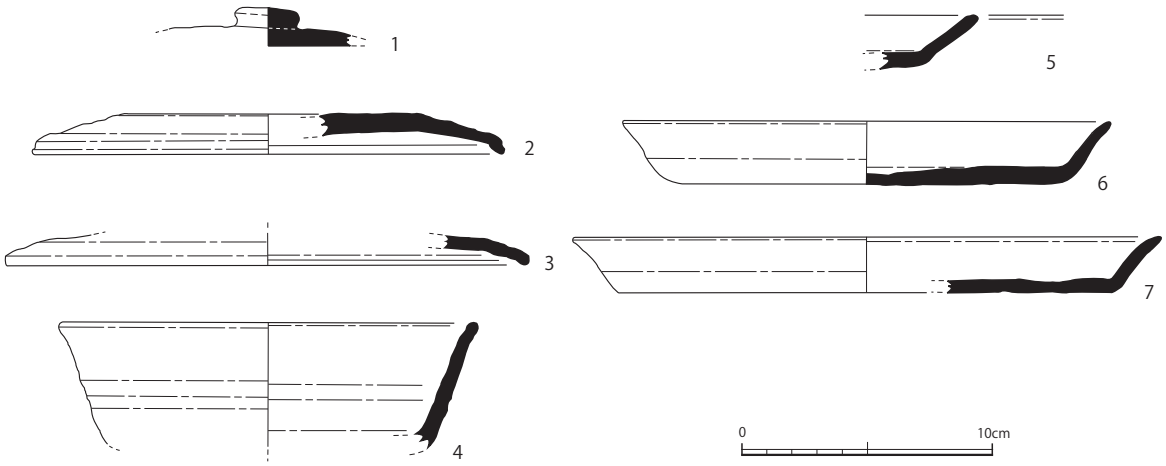
４は杯Ｂ身であり、口径16.5cm を測る。体部はわずかに外反し、口縁に至る。

５～７は皿である。いずれも底部は平坦であり、回転ナデが施されている。また、体部から口縁部にかけてわずかに外反して立ち上がる。５・６の口径は19.4～23.3㎝を測る。

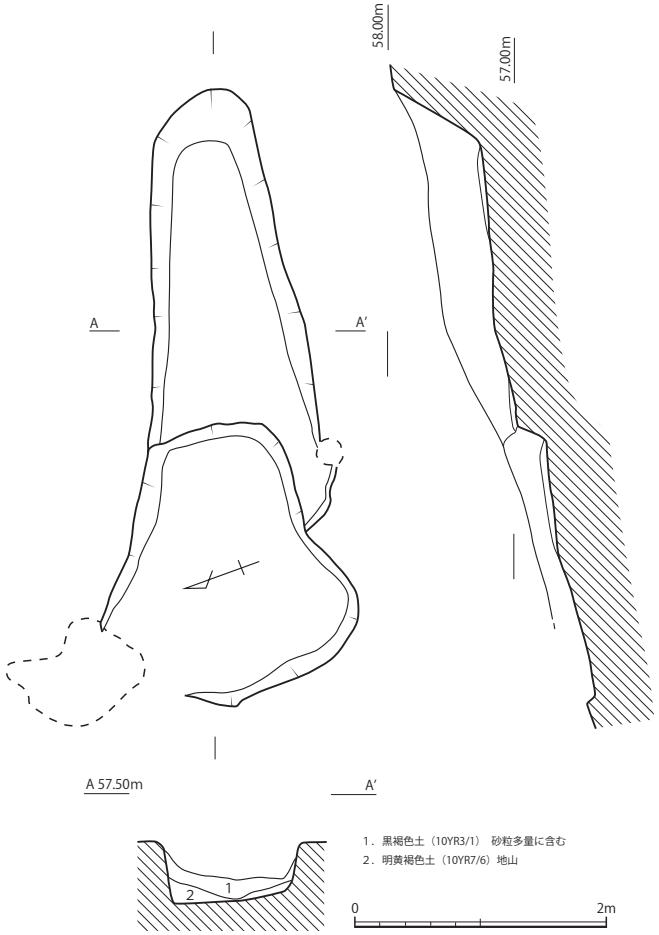
すべて焼成不良のため、軟質で黄橙系の色をしている。

### （３）SX01（第７図、図版５）

SX01は丘陵上の西斜面に位置する。標高約56～58mに位置し、等高線にほぼ直交するように検




**第６図　２号窯跡出土遺物実測図（1/3）**




**第７図　SX01実測図（1/60）**

出された。遺構検出時の平面形は長楕円形の浅い窪みで、一部植栽痕が認められた。

検出面の埋土は褐灰色土で、掘削を進めた所、上層はビニールや空き缶等を含む撹乱であることが判明した。撹乱除去後の埋土は黒褐色土であった。全長約4.9m、幅1.0～2.0m、深さ0.15m前後を測る。

**出土遺物**（第８図、図版６～８）

８～26はすべてSX01周辺で表採されたものである。８・９は杯Ｈ蓋である。口径は10.6～11.2cmを測る。いずれも天井部外面は回転ヘラ切り未調整である。８は内面に灰をかぶる。天井部外面にはヘラ記号が存在する。また、ヘラ記号以外にもいくつかの削痕がみられる。９は口縁部が外反している。

10～12は杯Ｇ蓋である。口径は7.9～8.6cmを測る。いずれも天井部外面は回転ヘラ切り未調整で、かえりは短く、内傾している。10は外面と内面の受部端部に灰をかぶる。また、口縁部にセットで焼成された杯身の一部が付着している。器高は低い。11も器高が低く、赤褐色をしている。12は内面に灰をかぶる。別個体の一部が天井部外面に付着しており、歪みがある。

13は杯Ｂ蓋である。口径は13.6cmを測る。かえりは内傾している。つまみは扁平なボタン状を呈し、外面に回転ヘラ削りを施した後に接着している。また、全体的に歪みがある。

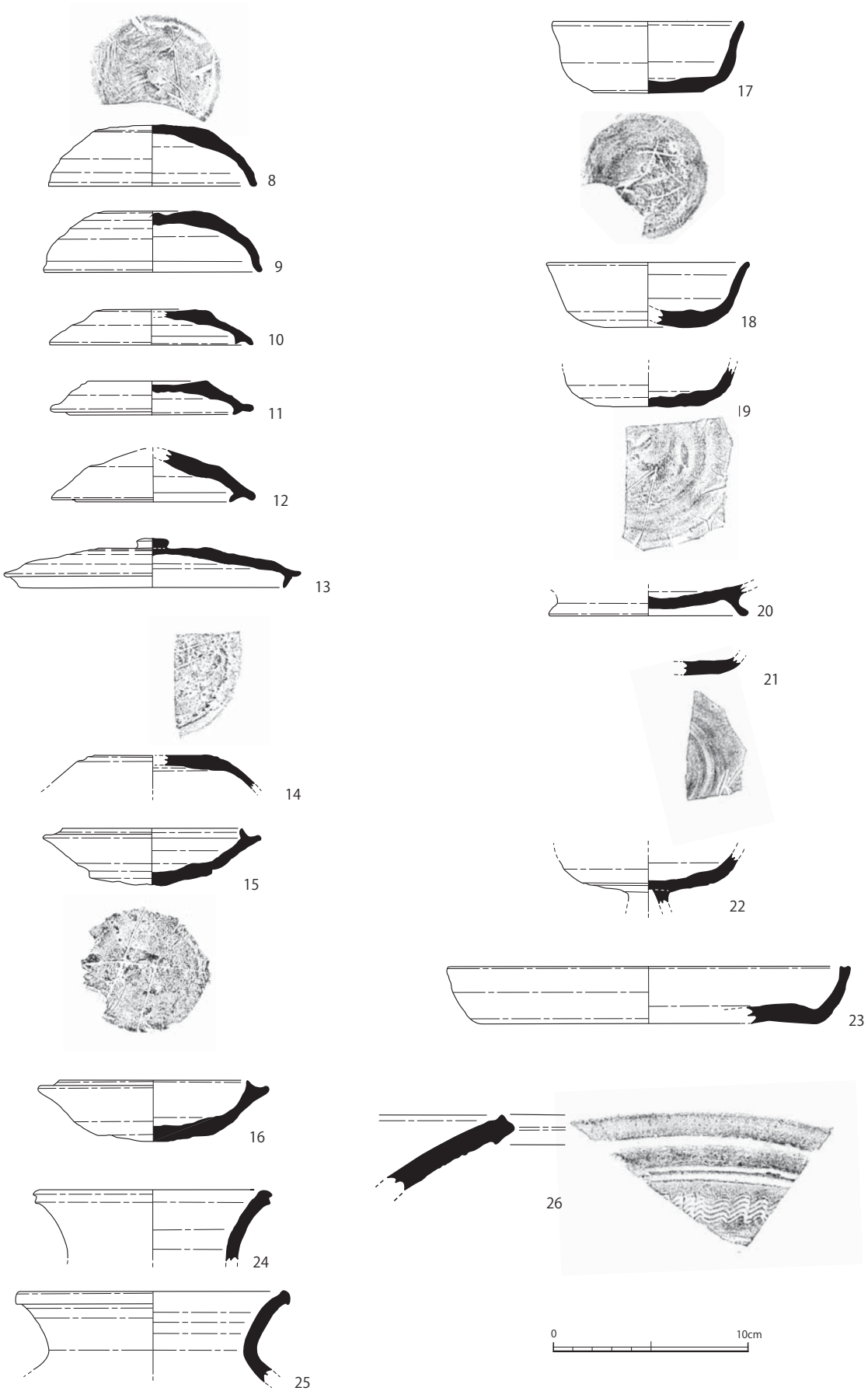
14は杯蓋の上部破片である。蓋の分類は不明。天井部は回転ヘラ切り未調整で、外面に灰をかぶる。また、天井部外面にヘラ記号がある。

15・16は杯Ｈ身である。口径は9.2～9.7cmを、最大径は11.15～11.8cmを測る。いずれも、底部外面は回転ヘラ切り未調整であり、口縁部の立ち上がりは0.3～0.5cmと短い。15は底部外面にヘラ記号がある。16は歪みがある。

17～19は杯Ｇ身である。17・18の口径は9.7～10.4cmを測る。17・18は体部が若干外側に反り、口縁部は外反する。17の底部外面にはヘラ記号があるが、これは筆順から「大」の字の可能性がある。「大」字状の記号を記した後、直線を２本刻んでいる。19は底部外面にヘラ記号がある。

20は杯Ｂ身で、高台部のみ残存する。高台端部は丸みをおび、外側に踏ん張る。

21は破片のため、詳細は不明であるが、本報告では杯身とした。底部外面にヘラ記号が刻まれている。




第８図　SX01周辺採集遺物実測図（1/3）

22は小型の無蓋高杯とみられる。杯部外面の底部と体部の境にはにぶい稜がめぐる。

23は皿である。口径は20.4cm で、焼きひずむ。口縁部は内湾し、口縁端部にはくぼみがめぐる。

24は壺の口縁部である。口径は11.6cm を測り、口頸部は外反している。口縁端部は断面四角形を呈し、外面に三角形の稜がめぐる。

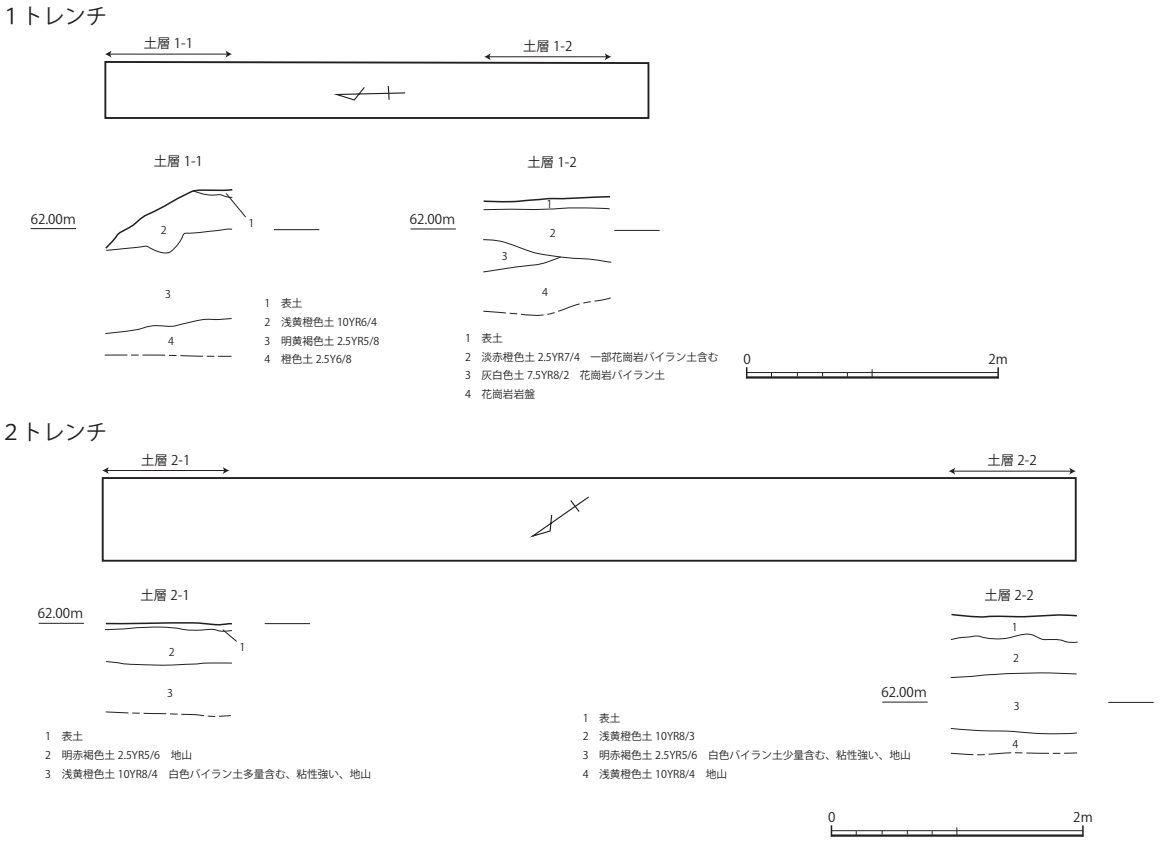
25・26は甕の口縁部である。25は口頸部が外反し、口縁端部はわずかに肥厚する。26は大型の甕で、口縁端部が四角形を呈す。外面には装飾があり、２条の沈線を上下に配した後、その中に波状文を施している。

### （4）１・２トレンチ（第９図、図版５）

現在、九州歴史資料館を中心に大宰府の外郭線に関する調査・研究が行われている。その一環として実施された現地踏査において、上大利小水城跡の後背に位置する本調査地にも土塁状遺構の存在が示唆された。

これを踏まえ、丘陵上で最も高い尾根に土塁状遺構を想定したトレンチを２か所設定し、土塁の有無について確認を行った。その結果、いずれのトレンチでも、表土直下は黄色系や明赤系の粘質土であった。また、その下層は花崗岩が風化したバイラン土が主体であった。一部、最下層で硬質の花崗岩バイラン土を確認した。これは丘陵の基盤岩と考えられる。

トレンチ調査の結果、土塁状遺構の存在を示すような砂質土と粘質土を交互に積み上げる堆積状況は確認できなかった。いわゆる自然堆積の様相を呈していた。出土遺物も皆無であった。




**第９図　１・２トレンチ実測図（1/60）**

# Ⅳ．総括

最後に今回の調査成果と遺構の時期的位置付けについて述べ、まとめとする。

**１号窯跡**　窯体の大部分は削平されており、床面のみ残存していた。出土遺物は皆無であり、時期不明である。立地や床面の残存状況など総合的に判断すると、２号窯跡と同時期頃ではないかと思われる。

**２号窯跡**　窯体の一部は削平により失われていたが、煙道部は良好に遺存していた。その構造は小型の地下式直立煙道窯であり、牛頸窯跡群における８世紀の窯の特徴をよく備えている。わずかに出土した遺物は、牛頸須恵器窯跡編年（以下、牛頸編年）（註１）に照らすと、ⅦＢ期に位置付けられる。以上、窯構造や遺物など総合的に判断すると、概ね８世紀中～後半の所産と考える。

**SX01**　遺構の立地から当初、窯跡の可能性を考えて調査を進めた結果、浅い溝状を呈する人為的な掘り込みであることを確認した。SX01周辺では須恵器の散布が認められ、こうした須恵器の時期は牛頸編年のⅤ～Ⅵ期に位置付けられ、概ね７世紀中～後半の所産である。

１号窯跡や２号窯跡の検出状況、丘陵上の不自然な平坦面などを考慮すると、当該地は調査前に既に大きく削平されていたと考える。

SX01より下部に位置する北斜面において、平成15年の豪雨災害時に法面が滑落した。その時、灰原が露出、窯跡の存在が判明した。しかし、窯跡や灰原の位置を特定する図面や写真等の資料はない。また、平成23年度に当該地において人力による壺掘りを実施し、灰原を確認している。『史跡牛頸須恵器窯跡指定地周辺確認調査』報告書には「長さ９ｍ×幅７ｍの範囲の凹地で窯体も良好に残存していると判断される（註２）」と記載があるが、窯体の確認には至ってないことが読み取れる。

当該地は急傾斜地で、地すべりする可能性もあることから、安全に配慮しながら調査を進めた結果、北斜面で長さ９ｍ×幅７ｍの範囲の凹地（SX01）を確認した。慎重に掘削を進めたものの、灰原や窯体は確認できなった。しかし周辺には須恵器が多量に散布しており、大きく焼き歪むものや釉着した資料がみられることから、SX01は窯跡の痕跡である可能性が推測された。須恵器の時期は概ね７世紀中頃～後半であることから、７世紀中頃段階に当丘陵北斜面に窯を構築し、操業。しばらく時間を置いた８世紀中頃に、谷地形で奥まった北東斜面に窯を複数構築し（１・２号窯跡）、操業したものと考えたい。

しかし、急傾斜地という立地、長年の風雨の影響、後世の掘削など様々な要因が重なり、遺構の保存環境に適さなかったのであろう。そのため、SX01がどのような意味を持つ遺構であるか断定するまでには至らなかった。

註１　舟山良一　2008「須恵器の編年」『牛頸窯跡群－総括報告書Ⅰ－』大野城市文化財報告書　第77集　大野城市教育委員会

註２　石木秀啓編　2015『史跡牛頸須恵器窯跡指定地周辺確認調査』大野城市文化財調査報告書　第124集　大野城市教育委員会

【参考文献】

林　潤也編　2009『牛頸後田窯跡群Ⅱ－77地点の調査－』大野城市文化財調査報告書　第89集　大野城市教育委員会

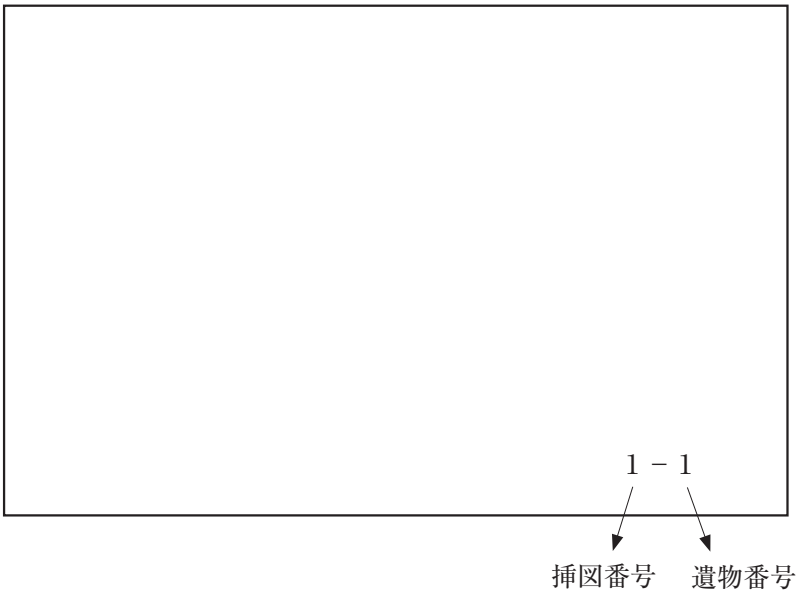
# 第１表　出土遺物観察表

| 遺物番号 | 種類 | 器種 | 出土地点 | ①口径②器高③底径<br>④高台径⑤最大径（cm）<br>※（　）復元値<br>〈　〉残存値 | 形態・技法の特徴 | A：胎土 B：焼成 C：色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 須恵器 | 杯蓋 | 2号窯跡 | ②〈1.5〉 | 内面はナデ。<br>外面は回転ヘラ切り。 | A：0.2mm ～ 0.5mm の白色粒を含む<br>B：不良<br>C：（内）浅黄橙 10YR8/3（外）浅黄橙 10YR8/3 | |
| 2 | 須恵器 | 杯蓋 | 2号窯跡 | ①（18.6）②（1.6） | 内面は回転ナデ、ナデ。<br>外面は回転ナデ、回転ヘラ切り。 | A：0.5mm の白色粒を含む<br>B：不良<br>C：（内）にぶい橙 7.5YR7/4（外）浅黄橙 7.5YR8/3 | 外面の一部が若干灰白色に変化 |
| 3 | 須恵器 | 杯蓋 | 2号窯跡 | ①（20.7）②（1.2） | 内面は回転ナデ。<br>外面は回転ナデ。 | A：0.5mm ～ 5.0mm の白色石・白色粒・黒色粒を含む<br>B：不良<br>C：（内）10YR 浅黄橙 8/4・10YR 灰黄褐 4/2<br>（外）10YR 灰黄褐 4/2 | |
| 4 | 須恵器 | 杯身 | 2号窯跡<br>周辺表採 | ①（16.5）②〈4.8〉 | 内面は回転ナデ。<br>外面は回転ナデ。 | A：0.5mm ～ 2.0mm 程の黒色粒を多量に含む<br>B：良好<br>C：（内）黄灰 2.5Y6/1（外）灰白 10YR7/1、褐灰 10YR6/1 | |
| 5 | 須恵器 | 皿 | 2号窯跡 | ②〈2.1〉 | 内面は回転ナデ。<br>外面は回転ナデ。 | A：0.1mm 程の白色粒を含む<br>B：不良<br>C：（内）にぶい黄橙 10YR7/4、明黄褐 10YR7/6<br>（外）にぶい黄橙 10YR7/4 | |
| 6 | 須恵器 | 皿 | 2号窯跡 | ①（19.4）②2.5<br>③（14.6） | 内面は回転ナデ。<br>外面は回転ナデ、回転ヘラ切り。 | A：0.1mm ～ 2.0mm の白色粒・白色石を含む<br>B：不良<br>C：（内）浅黄橙 10YR8/4（外）浅黄橙 10YR8/3 | |
| 7 | 須恵器 | 皿 | 2号窯跡 | ①（23.3）②2.2<br>③（19.7） | 内面は回転ナデ、ナデ。<br>外面は回転ナデ、回転ヘラ切り。 | A：0.1mm 程の白色粒を含む<br>B：不良<br>C：（内）淡黄 2.5Y8/3（外）浅黄橙 10YR8/3 | |
| 8 | 須恵器 | 杯蓋 | 表採 | ①（10.6）②3.1 | 内面は回転ナデ。<br>外面は回転ヘラ切り未調整、回転ナデ。 | A：1.0mm 程の黒色粒を含む<br>B：良好<br>C：（内）灰白 10YR7/1（外）褐灰 10YR5/1 | 天井部外面にヘラ記号あり<br>ヘラ記号以外の削痕がある<br>灰かぶり |
| 9 | 須恵器 | 杯蓋 | 表採 | ①（11.2）②3.1 | 内面は回転ナデ、ナデ。<br>外面は回転ヘラ切り未調整、回転ナデ。 | A：0.5mm ～ 1.0mm の黒色粒を含む<br>B：やや不良<br>C：（内）にぶい黄橙 10YR7/2<br>（外）浅黄橙 10YR8/3、にぶい黄橙 7/3 | |
| 10 | 須恵器 | 杯蓋 | 表採 | ①（8.6）②1.8<br>⑤（10.4） | 内面は回転ナデ。<br>外面は回転ヘラ切り未調整、回転ナデ。 | A：2.0mm 程の白色状の石を含む<br>B：良好<br>C：（内）灰 N4/（外）褐灰 6/1、浅黄橙 10YR8/3 | 外面に灰かぶり |
| 11 | 須恵器 | 杯蓋 | 表採 | ①（8.4）②1.7<br>⑤（10.4） | 内面は回転ナデ、ナデ。<br>外面は回転ヘラ切り未調整。回転ナデ | A：1.0mm ～ 4.0mm の白色粒を含む<br>B：良好<br>C：（内）にぶい赤褐 5YR5/4（外）にぶい橙 5YR6/3 | |
| 12 | 須恵器 | 杯蓋 | 表採 | ①（7.9）②〈2.6〉<br>⑤（10.4） | 内面はナデ、回転ナデ。<br>外面は回転ヘラ切り未調整、回転ナデ。 | A：1.0mm ～ 4.0mm の白色粒を含む<br>B：良<br>C：（内）にぶい赤褐 5YR5/4（外）にぶい橙 5YR6/3 | 歪みあり<br>天井部外面に別個体の一部が付着 |
| 13 | 須恵器 | 杯蓋 | 表採 | ①（13.6）②2.5<br>⑤（15.2） | 内面はナデ、回転ナデ。<br>外面は回転ヘラ削り、回転ナデ。 | A：2.0 mm程の白色石を含む<br>B：良<br>C：（内）灰褐 5YR4/2（外）灰褐 5YR5/2 | 歪みあり<br>つまみを後で接着 |
| 14 | 須恵器 | 杯蓋 | 表採 | ②〈1.2〉 | 内面はナデ、回転ナデ。<br>外面は回転ヘラ切り未調整、回転ナデ。 | A：1.0mm 程の白色上の粒を含む<br>B：良<br>C：（内）灰白 10YR7/1（外）淡黄 2.5Y8/3 | 天井部外面にヘラ記号あり<br>外面に灰かぶり |
| 15 | 須恵器 | 杯身 | 表採 | ① 9.2 ② 2.9 ③ 6.25 ⑤ 11.15 | 内面は回転ナデ、ナデ。<br>外面は回転ヘラ切り未調整、回転ナデ。 | A：2.0mm ～ 3.0mm 程の白色石を多量に含む<br>B：良好<br>C：（内）褐灰 10YR5/1（外）外灰白 10YR7/1 | 底部外面にヘラ記号あり<br>外面の一部が黒変 |
| 16 | 須恵器 | 杯身 | 表採 | ①（9.7）②3.1 ③（5.7）<br>⑤（11.8） | 内面は回転ナデ、ナデ。<br>外面は回転ヘラ切り未調整、回転ナデ。 | A：1.0 mm～ 2.0 mmの白色状、黒色状の粒を含む<br>B：良<br>C：（内）黄灰 2.5Y6/1（外）明褐灰 7.5YR7/1 | 歪みあり |
| 17 | 須恵器 | 杯身 | 表採 | ①（9.7）②3.65 ③（5.55） | 内面は回転ナデ、ナデ。<br>外面は回転ナデ、回転ヘラ切り。 | A：0.5mm 程の白色粒を含む<br>B：やや不良<br>C：（内）灰黄褐 10YR6/2（外）にぶい黄橙 10YR7/3 | 底部外面にヘラ記号？あり<br>※「大」の字か？ |
| 18 | 須恵器 | 杯身 | 表採 | ①（10.4）②3.3 ③（4.6） | 内面は回転ナデ、ナデ。<br>外面は回転ナデ、回転ヘラ切り。 | A：1.0mm ～ 4.0mm の白色粒、白色石を含む<br>B：良<br>C：（内）黄灰 2.5Y6/1（外）灰白 2.5Y7/1 | |
| 19 | 須恵器 | 杯身 | 表採 | ②〈2.0〉③5.2 | 内面はナデ、回転ナデ。<br>外面は回転ナデ、回転ヘラ切り。 | A：1.5mm 程の白色粒を含む<br>B：良好<br>C：（内）褐灰 7.5YR4/1（外）褐灰 7.5YR5/1 | 底部外面にヘラ記号あり |
| 20 | 須恵器 | 杯身 | 表採 | ②〈1.6〉④10.2 | 内面は回転ナデ、ナデ。<br>外面は回転ナデ。 | A：：0.5mm ～ 1.0mm 程の白色粒を含む<br>B：良好<br>C：（内）褐灰 10YR6/1（外）灰白 10YR7/1 | |
| 21 | 須恵器 | 杯身？ | 表採 | ②〈0.85〉 | 内面はナデ、回転ナデ。<br>外面は回転ナデ、回転ヘラ削り。 | A：1.0 mm程の白色粒を少量含む<br>B：良好<br>C：（内）褐灰 7.5YR、灰赤 2.5YR4/2<br>（外）灰黄褐 10YR5/2、黒褐 2.5Y3/1 | 底部外面にヘラ記号あり |
| 22 | 須恵器 | 高杯 | 表採 | ②〈2.55〉 | 内面はナデ、回転ナデ。<br>外面は回転ナデ。 | A：1.0mm ～ 2.0mm の白色粒を含む<br>B：良<br>C：（内）褐灰 7.5YR、灰赤 2.5YR4/2<br>（外）灰黄褐 10YR5/2、黒褐 2.5Y3/1 | |
| 23 | 須恵器 | 皿 | 表採 | ①（20.4）②（2.9）③（17.2） | 内面は回転ナデ。<br>外面は回転ナデ、回転ヘラ切り。 | A：0.5mm ～ 4.5mm の白色、浅黄橙色の石を多量に含む<br>B：良好<br>C：（内）褐灰 10YR5/1（外）灰黄褐 10YR4/2 | 歪みあり |
| 24 | 須恵器 | 壺 | 表採 | ①（11.6）②〈3.6〉 | 内面は回転ナデ。<br>外面は回転ナデ。 | A：2.0mm ～ 4.0mm の白色石を多量に含む<br>B：やや不良<br>C：（内）灰白 N7/（外）灰白 N7/、灰 N4/ | |
| 25 | 須恵器 | 甕 | 表採 | ①14・0②〈4.6〉 | 内面はナデ。<br>外面はナデ。 | A：2.0 mm程の黒色粒を含む<br>B：良<br>C：（内）灰白 10YR8/1（外）灰白 10YR8/1 | 側部内面の一部が剝離 |
| 26 | 須恵器 | 甕 | 表採 | ②〈3.8〉 | 外面に沈線、波状文。 | A：1.0mm ～ 2.0mm の白色石を含む<br>B：良好<br>C：（内）にぶい黄橙 7/2（外）灰白 10YR7/1 | 外面に文様が施されている |

# 図　　版

凡例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。



（１）調査地全景（北東から）

（２）１・２号窯跡完掘状況
（北東から）

図版２

（１）１号窯跡検出状況：遠景
（東から）

（２）１号窯跡検出状況：近景
（東から）

（３）１号窯跡土層断面
（北東から）

（１）１号窯跡完掘状況
（東から）

（２）２号窯跡検出状況
（北東から）

（３）２号窯跡完掘状況
（真上から）

図版４

（１）２号窯跡完掘状況（北東から）

（２）２号窯跡断ち割り状況（北東から）

（１）SX01完掘状況（東から）

（２）SX01土層断面（西から）

（３）１トレンチ全景（南から）

（４）２トレンチ全景（南から）

６－１

６－２

８－８

６－６

８－10

６－７

８－12

８－９

８－13

出土遺物（１）

8－14

8－15

8－17

8－19

8－20

8－21

8－22

出土遺物（２）

図版８

８－24

８－26

出土遺物（３）

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふ り が な | たにがにいせきぐん１ |
| 書 名 | 谷蟹遺跡群１ |
| 副 書 名 | 第１次調査 |
| 巻 次 | １ |
| シ リ ー ズ 名 | 大野城市文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第176集 |
| 編 著 者 名 | 柴田　剛、木原　尭、山元　瞭平 |
| 編 集 機 関 | 大野城市教育委員会 |
| 所 在 地 | 〒816-8510　福岡県大野城市曙町2-2-1　電話　092（501）2211 |
| 発 行 年 月 日 | 2020年３月31日 |

| 所収遺跡名（ふりがな） | 所在地（ふりがな） | | コード 市町村 | コード 遺跡番号 | 北緯 °′″ | 東経 °′″ | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 谷蟹遺跡群（たにがにいせきぐん） | 福岡県大野城市旭ヶ丘（ふくおかけんおおのじょうし あさひがおか）１丁目778番9、792番1、同２丁目778番39 | | 402192 | | 33°30′40″ | 130°28′57″ | 2018年８月６日～2018年11月30日 | 4,673㎡ | 宅地開発 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 谷蟹遺跡群 | 生産遺跡 | 古代 | 窯跡２基 | | 須恵器 | | | | |

| | |
|---|---|
| 要 約 | 調査の結果、２基の須恵器窯跡を確認した。いずれも削平を受けていたが、２号窯跡については地下式の直立煙道窯跡であることを確認した。操業時期は、窯構造や出土須恵器から８世紀中頃～後半とみられる。また、７世紀中頃～後半の須恵器も散布しており、これらには焼き歪みや釉着資料が確認できたことから、当該期の窯跡の存在も示唆されたが、土砂崩れなどの要因ですでに失われている可能性が高いと判断した。 |

大野城市文化財調査報告書　第176集
谷蟹遺跡群１

令和２年３月31日

発 行　大野城市教育委員会
〒816-8510
福岡県大野城市曙町２－２－１

出 版　(有)九州コンピュータ印刷
〒815-0035
福岡市南区向野１丁目19番１号